海外学界ニュース

ウィーンインド学研究所の近況

雲井昭善

インド学・佛教学に関する学術雑誌として夙に高く評価されている〝*WZKSO*〟(*Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens und Archiv für indische Philosophie*)誌、及びこの雑誌の出版事業を推進しているウィーンインド学研究所の現状について、私はさきに一、二の報告をなした(『大谷学報』第四十三巻第二号、『印度学佛教学研究』第十二巻第二号)。

一九六三年の十月、私はウィーンを去ったのであるが、その後、フラウワルナー博士からの二、三の私信によって、インド学研究所における多少の変動と、現在、各研究員が従事しているアルバイトの一端を窺うことができた。以下において、ウィーンインド学研究の近況について報告したい。

研究所の主任教授フラウワルナー博士は、一九六四年三月をもってウィーン大学を定年退職(Professor Emeritus)し、その後任として、ユトレヒト(オランダ)大学に勤務中だったオーバーハンマー氏(Dr. Gerhard Oberhammer)が就任した。オーバーハンマー氏は、既に知られるように、サーンキヤ哲学特にユクティディーピカー(*Yuktidīpikā*)に関する研究を発表(学位論文)し、〝*WZKSO*〟誌にも氏の諸論文がみられるところである。(*The Authorship of the Saṣṭitantram*. Bd. IV., S. 71–91 1960., *On the Sources in Jayanta Bhaṭṭa and Uddyotakara*. Bd. VI., S. 91–150 1961., *Ein Beitrag zu den Vāda-Traditionen Indiens*. Bd. VII., S. 63–103 1962)

フラウワルナー博士は、退官後も従来通りの演習を自宅で継続している。特に、一九六三年十月以降、カルカッタ大学のバッタチャルヤ氏(Dr. Gopikamohan Bhattacharyya)が研究所へ迎えられるに及んで、インド新論理学(Navya-nyāya)の研究に入っている。博士の書翰によれば、一九六三年十月以降から昨年度にかけて、十二世紀後半の論理学者ガンゲーシャ(Gaṅgeśa)の〝*Tattvacintāmaṇi*〟に関する論文を用意したとある。又、バッタチャルヤ氏は、〝*Raghunātha Śiromaṇi*〟について論文を作成しつつあると聞く。なお、バッタチャルヤ氏には、周知の如く、インド哲学における神論に関する近著がある。(*Studies in Nyāya-Vaiśeṣika Theism*. Calcutta 1961)

ユトレヒトにおけるオーバーハンマー氏のポストへは、フ博士のもとで法称の論理学を研究していたフェッター氏(Dr. Tilmann Vetter)がその後任として一九六四年度より就任した。彼の学位論文〝*Erkenntnisprobleme bei Dharmakīrti*〟は、一九六四年度にオーストリア学士院より出版された。この

書の内容については、他日、稿を改めたい。同じく、フ博士のもとで論文を作成中だったシュミットハウセン氏（Dr. Lambert Schmithausen）も、既に „*Maṇḍanamiśra's Vibhramavivekaḥ und die indische Irrtumslehre*“ を完成し、目下印刷中。現在は大学講師として就職のためのアルバイトとして Vijñaptimātratāsiddhi と Yogacāra の研究を始めたという。なお、彼には „*Vorstellungsfreie und vorstellende Wahrnehmung bei Śālikanātha*“（*WZKSO* Bd. VII., S. 104–115. 1963）がある。

研究所の助手シュタインケルナー氏（Dr. Ernst Steinkellner）は、„Zur *Zitierweise Kamalaśīla's*“ の論文（*WZKSO* Bd. VII., S. 116–151 1963）を発表し、昨年来、Vardhamāna について研究をすすめている。フ博士の主幹によるこの学術雑誌の編輯事務を扱っている。なお、彼は、さきに „*Die Literatur des älteren Nyāya*“（id. Bd. V., S. 149–162 1961）を発表した。

フラウワルナー博士の近業は、„*WZKSO*“ 第七巻の論文 „*Abhidharma-Studien*“ に引き続いて、その第八巻目にこの論文の続きが執筆されている。言うまでもなく、博士の研究領域は広範囲に亘るのであるが、少くとも認識論の問題解明に研究の焦点があわされていることは疑うべくもない。私のウィーン滞在中、博士の学問的志向は、唯識・アビダルマ佛教の認識論の諸問題へ向けられたようであるが、その当時の研究の業績が、今、この雑誌を飾っている。その後、アビダルマ佛教研究と並行して、新論理学の方向へと向い、その成果は、多分第九巻（一九六五年度）の雑誌に見られることであろう。すなわち、„*Arbeitsweise Raghunātha Śiromaṇi's*“ 及び „*Naiyāyika Prabhākaropadhyāya*“ 等のアルバイトである。なお、大学退官後の博士の新しい仕事として、『哲学史叢書』のインド部門出版を担当することになっている。

もとより、博士にとって、インド哲学史全五巻（第二巻まで既刊）の完成が希われるのであるが――そしてその原稿は既に用意されている――その完成のために、目下の如きアルバイトが続けられているかに推察される。

博士のこれまでの業績の中、特に佛教論理学関係の業績については、かつて京都大学服部正明助教授によって報告された。（『印度学試論集』一九六〇年度四一―四五頁）

„*WZKSO*“ 誌は、一九五五年、オーストリア国が永世中立をめざす共和国として再出発したのを機会に、その前身 *WZKM* の枠を更に拡げて、新たに Archiv für indische Philosophie の名称が加えられた。そして、インド哲学・佛教に関する論文が、従来より広くとりあげられるようになった。

この学術雑誌は、インド哲学の碩学エーリッヒ・フラウワルナー博士が主幹するもので、編輯の細部に亘っては博士自身がこれに当り、その事務的な面を助手のシュタインケルナー氏が担当している。この雑誌の最近の傾向として、印度哲学・佛教に関する論文が多くみられることが注目される。特に、一九六三年度（第七巻）の如きはその感を深くする。そして、この傾向は、今後の „*WZKSO*“ 誌を特徴づけることになろう。